

ノンフィクションライター・西岡研介氏が「週刊東洋経済」6月11日発売号から「集中連載『JR歪んだ労使関係』」を開始し、第1回で「JR東労組3万人脱退の真相」を報じた。第2回は6月18日発売号で「JR北海道労使癒着の深い闇」と題し、経営課題が山積のJR北海道と、第一組合であるJR北海道労組（北鉄労、JR総連加盟）に鋭くメスを入れた。

西岡研介氏による「東洋経済」の集中連載「JR歪んだ労使」(6/11~)

第2回目は、「JR北海道 労使癒着の深い闇」

最大労組「北鉄労」内における『スパイ事件・除名処分』、『平和共存否定路線の堅持』、会社への人事介入

同記事では、北鉄労の機関紙「ひびき（2017年7月7日付）」の掲載内容から部分的に表面化していた、北鉄労の札幌運転所分会に所属していたA氏の制裁（除名処分）について、背景やその後の詳細な、かつ衝撃の事実関係を報じている。

常軌を逸する活動…不祥事で懲戒解雇になった組合員宅を、第一組合が“搜索”？！

「組合員の除名処分について」なる書面からの情報として、「15年11月、札幌運転所分会が、不祥事により懲戒処分となったB元組合員の調査を行う過程で、B元組合員が公安警察と関係を持ち、3年半にわたるスパイ行為が確認されました。B元組合員は『公安警察の求めに応じて、A組合員等から組合の情報を取得し、公安警察に提供していた』ことを自ら認めました。」、「A氏はB氏に提供していた資料の中で、<組合の取り組みや（組合）役員を口汚く批判>し、資料の中には<JR北海道労組を否定する組織破壊文書>も含まれていたという。」などと掲載。また、組合関係者の情報として、「BはA氏と同じ職場に勤務していたが、会社のカネを横領し懲戒解雇された。この不祥事を受け組合がBの自宅を“搜索”したところ、道警の公安刑事の名刺などが見つかり（後略）…」と掲載している。不祥事で会社を解雇された組合員宅を、組合が“搜索”するなど、およそ普通の労働組合の活動では理解しがたい。「それにしてもこのご時世に『公安警察』『スパイ行為』などというまがまがしい言葉が並ぶ文書を、組合員に配布する組合がほかにあるだろうか」警察に渡されると不味い資料でもあるのだろうか。「北海道警がJR北海道労組の情報収集をしていた理由についてはいうまでもない。道警にとって、革マル派と密接な関係にあるこの組合は監視対象だからだ。」

組合が人事に介入！労使癒着の深い闇はまだ続く～異常な労使関係に警鐘！

記事の後段では、北鉄労が過去にも問題とされてきた「平和共存否定」の方針をいまだに堅持していることのほか、「組合が人事に介入 労使癒着の関係」との見出しで、北鉄労と会社のズブズブの関係にメスを入れている（札幌車掌所の不当配転事件、裁判で会社は完全敗訴）。

再びA氏への制裁前後に話は戻るが、「除名処分が決定される前の16年11月、A氏は釧路支社に異動になったが、異動先は入社以来一度も経験したことのない「指令」で、A氏周辺では、組合の意を受け会社が畑違いの部署に飛ばした、と解された。」その後「A氏は（中略）今年の1月11夜、家族に『釣りに出掛ける』と言って外出したまま連絡が取れなくなり、翌朝、釧路港西側の海岸で、遺体で見つかった（中略）。自死か事故か真相は不明だが、A氏を知る関係者は皆一様に、彼を『JR北海道の異常な労使関係の犠牲者』だととらえている。」と掲載。そして、「『犠牲者』はA氏だけではない。11年の石勝線での特急脱線炎上事故から4ヵ月後、石狩市内の海岸で自殺したJR北海道のトップ、故中島尚俊社長もその一人だ。」とし、次号（6月25日号）で、初めて明らかになったその真相を報じるとしている。

明らかにされていく、革マル派と密接な関係の北鉄労による会社の掌握度合いと闇深さ。大量の血税の投入・支援を受ける会社で、このような異常な労使関係を放置してはならない！

